

■ 修士論文要旨

農家の「イエ」からの脱却

— おおや高原を事例に —

坂本千夏*

日本の農村と農業は今日、未曾有の危機に直面している。戦後、一貫して進んできた農業就労人口の減少と食料自給率の低下といった農業部門の弱体化は、近年一層深刻化し、1960年で約1,454万人であった農業就業人口は、2000年にはその4分の1にまで減少した。加えて、農業就業人口の高齢化も進行しており、基幹的農業従事者数の約35.8%は70歳以上の高齢者で占めている。さらにこのような農業の担い手の減少と高齢化による農業労働力の弱体化は、1産業の問題にとどまらず、日本社会のシステム全体に大きな影響を及ぼすに至っている。つまり、食料の安全性の保持、食糧確保、環境保全問題、文化の変容、地域社会機能の弱体化など社会の広範囲にわたる問題を惹き起こしている。また、そのような状況下での少子高齢化による人口構造の変化は、とりわけ農業における就業人口の減少と高齢化の問題に更なる拍車をかけており、食糧自給率の低下という深刻な問題を惹き起こしている。それらの解決に向けての早急な取り組みが迫られている。

このような農業部門の弱体化の背景に、農村や農村家族の近代化の遅れがあり、そして、家族の近代化の遅れは産業間、従って都市と農村における女性の地位の格差を生むと考える。すなわち、家族機能と農業生産機能の分離が困難な農家では、これが家族の近代化を阻む要因として立ちだかっているのである。特に女性にとって農業・農村は魅力ある生活の場と捉えられず、これがたとえば農業青年の深刻な嫁不足を惹き起こしている。すなわ

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科公共圏創成専攻2005年度 地域コミュニティ研究領域 修士課程修了

ち、農村と農業家族の近代化の遅れが、女性の地位向上の遅れをもたらし、それが農村の少子高齢化を一段と深刻化させているとみることができる。しかし近年、このような農村地域の状況の中においても、自立的な活動に取り組む女性も徐々に出現し、女性の認定農業者も近年増加する傾向にある。女性農業者の起業の事例も増加し、『平成16年度 食料・農業・農村白書』には、農家女性の活躍を推奨する記述がみられた。さらに農村女性の起業の増加を取り上げた新聞記事もみられ、農業政策の分野においてもようやく女性の地位向上の重要性が認識され始めてきた。

本稿では、農業部門における女性の地位向上が、今日、日本農村が直面する問題の解決の方策の1つであるとの認識に立って、農家の近代化と農家女性の地位向上を阻む要因を家族社会学の視点から分析することを目的としている。農家の近代化が困難である要因の1つに、家族機能と生産機能が未分離である点が挙げられる。すなわち、農家である限り生産機能（農業経営）を家族から切り離すことが出来ない。しかも、祖先から代々の家長を通して継承されてきた家産である農地を主要な経営基盤としているため、農業経営そのものが家父長的構造の成立基盤を内包している。そこで、農家でありながらも生活の場と生産の場が地理的に分離されている、兵庫県養父市大屋町のおおや高原で農業を営むおおや高原有機野菜部会を対象とした事例調査にもとづき、農家の家父長的要素が残っている部分と消え去った部分を明らかにしたい。そ

の分析の視点として、家族内における女性の地位と役割を具体的に取り上げて、農家における近代化の進行をみていくと同時にそれを阻む要因があるならば、それを指摘したい。

I章では、農家の「イエ」的構造を明らかにするため、喜多野・鈴木・有賀のイエ理論を通してイエ概念の再構築を試みた。すなわち、家族特有の機能と生産機能を併せ持つ家族を「イエ」と捉える点においては3氏共通の立場に立つ。しかし、有賀と喜多野では、異なる機能を併せ持つ家族を統合する原理が異なる。喜多野は家父長制によって統合された家族を「イエ」と呼称し、対して有賀は生活連帯関係や、同じ生活共同による一体感によって統合された家族を「イエ」と解する。有賀は家父長制を「イエ」の構造原理とは捉えずに、家族機能と生産機能を併せ持つ、つまり、農家を取り囲む外的諸条件から捉えて農家を「イエ」と称する。しかし、有賀の分析視点では、「イエ」を正確に把握できないと考える。たとえば、地域社会や親族関係は男性優位の伝統的価値観を保持し、家父長制成立の外的条件として作用している。また、農家の内的諸条件においては、今日でも農地は家産として捉えられており、家族形態も直系家族形態の割合が高い。以上のことから、農家は、現在においても家父長制的要素を併せ持つと捉えることができると考える。

II章では、統計的データに基づいて現在の日本農村の現状と直面する問題点、すなわち、就農者の減少と高齢化が惹き起こす問題点を指摘した。III章では、II章で指摘した日本農

村の抱える問題が大屋町においてどのように現れているのか、また、大屋が地域社会として存続するために直面する問題は何かを明らかにした。すなわち、町の総面積の90%以上が山林で占められているため、古くから多くの農家が養蚕などの兼業で生計を賄っていた。さらに、大屋町では戦後の町の産業を支えていた明延鉱山の閉山の影響を受け、人口及び世帯数が大きく減少し、全国の農村地域と比べても、農業就業人口と高齢化がより深刻であることを指摘した。大屋町の抱えるこれらの問題点の克服のためにおおや高原の開発が始まった。その経過とおおや高原で農業を営む農家で組織されたおおや高原有機野菜部会の現状について指摘したのが、IV章である。おおや高原開発の経過は、想像を絶するニッケル障害との戦いに始まり、行政やコープこうべなどの各関係機関の支援によって、現在の施設栽培の営農スタイルが確立され、現在では収益の見込みのある農業が可能となった。そのようなおおや高原で営農する農家で組織された部会は、地域共同体としての農業集落とは以下の3点で異なる性質を持つ。つまり第1に、新しく造成された土地（農地）であることから、生産機能と家族機能の地理的分離が実現している。第2におおや高原部会の農家は、9戸のうち5戸は町外からの新規就農農家であり、職業として自ら農業を選択した農家である。すなわち、それらの農家で結成されたおおや高原有機野菜部会は、伝統的に組織された地縁集団ではなく、目的的に組織された集団である。第3に各おおや高原農

家の生産活動の独立性が基本的に確立されている。以上の3点は、「イエ」的構造の払拭を促進する要素であり、つまりおおや高原には「イエ」的構造を払拭する外的環境が整っている。V章では、そのような外的条件において農業に従事する女性に視点を当て、事例調査に基いて、家族の内的諸条件の考察を試みた。

まず、農家の内的諸条件である家族意識やジェンダー意識については、就農以前の妻の就業状況によって差異が確認できるものの、固定的な性別役割分業のみられない農家がおおや高原にみられた。つまり、伝統的家族観を持つ家族は性別役割分業が成立しやすく、家事の主体は女性となる事が多く、今回の事例でも、全てのおおや高原農家において妻が家事を主として担っている結果が得られた。しかし、おおや高原における家事の性別分業は、「旧来のムラ」にみられるような固定的な分業ではなく流動的に分業されており、しかも、おおや高原における農家には、家事の固定的な性別役割分業意識が希薄化している農家もみられた。そしてそれらの農家においては、家父長的要素の希薄化がより進んでおり、もはや家長的性格は消滅したと考えられる。つまり、家父長的要素が希薄で性別役割分業も流動的であり、生産機能と家族機能を併せ持つ農家において、近代家族の構造を持つ農家の出現が確認できた。それら以外のおおや高原農家においても、家事も家族生活には欠かせない仕事の1つであるという夫の理解がみられ、おおや高原農家では全体的に家

父長制が希薄化していると捉えることができた。

農家の生産機能の基盤である農地の捉え方においては、先祖から代々継承されてきた家産ではなく、自らの職業遂行のために新たに獲得した個人、もしくは夫妻の資産として捉えられている。その象徴として、農地の名義や農機具の名義が妻である農家がおおや高原には存在した。加えて、有限会社化した農家もみられた。農業経営の有限会社化は、家産として捉えられていた農地が会社の資産になり、農地を資産とすることであり、農地が資産と化すことは農家を「イエ」として成立させた家産の払拭であると捉えられるだろう。それら以外の農家においても、農地の継承を子どもに希求するものの、そこには伝統的な価値観はみられなかった。すなわち子どもに対する農地の継承に強制的、もしくは当然であるという意識がみられず、その意識の中には農業が子どもにとって魅力ある職業の1つであると捉えてほしいという個人の価値観による意識であると考えられる。つまり、農家の生活基盤である農地に対するおおや高原農家の意識においても、「イエ」的要素の払拭が確認できた。

おおや高原農家は、内的環境である農家自身も農家を取り巻く外的環境も、「イエ」的構造を希薄にする構造を持つと考えられる。そのような内的・外的環境におかれた農家女性は、経営者である夫と対等なパートナーシップの関係を築いており、能動的に農業経営に参画している実態が明らかになった。中

には播種計画や納税申告を担う妻もみられ、夫と共同で農業の経営を担う農家も現れている。また、おおや高原農家の女性の中に、兵庫県認定の女性農業士として地域社会で活躍する女性も出現している。

おおや高原部会農家は、現在においても機能の分化が行われておらず、都市部と比較して家族の近代化の進行度が後退している農村地域に、新しい農業家族のあり方を予見させる農家である。